高橋ゼミ各期の想い出

第一期生　昭和47年(23名)(女子 3名)(聴講生 3名)

私が最初にゼミを担当した年であり、その年の受講希望者は 200人を越し、試験の日は２号館が満席だった。そのうちから20名だけを入室させた。その後、日文から 3名の女子学生が聴講生として入室した。

私もゼミ生も共に初心者だったので正に手探りでのゼミ開始であった。夏合宿は信州は妙高高原のホテル、この合宿には経済研出身で当時大学院に入っていた学生も参加した。

今と同じ 6泊 7日であり、そのスケジュールはこれまた今と同じにゼミ生達が自主的に決定した。朝 9時から夕方の 5時までが勉強（尤も、近頃は 5時半迄）、夜の 7時から夕食そしてコンパ、これも今と同じ。高桑礼次郎なる名コンパ長がいて、これに「礼次郎踊れ！」の命令でコンパが始まったのを覚えている。

レクリエションは野尻湖行き、皆でボートを漕いでいたら突然大風が吹き出し、あれよ、あれよと云ううちに野尻湖の南端に全員吹き流され、必死の思いで帰還した。

合宿最後の日は全員でホテルを掃除したらマネージャーが感激して便箋一冊ずつゼミ生に呉れた。この行事は高橋ゼミの伝統として今に伝えられている。

後期の授業開始迄にレポート三十枚の提出、私が決めたのはこれだけである。

四年時の合宿は嵐山町の槻川荘、この時からコンパ用として各自が酒一升持参という制度が制定された。あるコンパの晩、すっかり酩酊した一人のゼミ生が便所に入ったまま何時迄たっても出てこない、仲間の一人が呼びに行った、いっこう音沙汰がない、戸を開けようとしても開かない、此の馬鹿者は中で大鼾をかいて寝ていたのである。

この期は未だ修学旅行はなかった。この期の連中は竹田の子守歌が好きで全員で歌っていた。高橋ゼミの原形はこの期に出来た。なお、卒論は100 枚以上とした。

第二期生　昭和48年(28名)(女子 0名)(聴講生 2名)

この年も受講者が多く 200名近く来た、その内26名を採ったが男ばかりで野蛮人が多かった。しかし、線路は一期生が敷いたので滑り出しは上々、夏合宿は山形蔵王のホテル、内容は一期と同じ。昼休みに全員で前の広場（草原）で野球、球が草原に入って見えなくなると全員が横一列に並んで球探し、仲間意識が強くなる。レクリエションは蔵王山の御釜行き、合宿最後の晩のコンパは余りに盛大過ぎてホテル側からクレーム、仕方なく外に出て月を仰いでのコンパ、それでも次の日はきれいに掃除をして帰る。

春合宿は房総は白浜。秋に修学旅行兼勉学として諏訪湖畔の旅館に一泊、その晩、「先生素晴らしいショウがあるので是非御出で下さい」というので出掛けたら、なんとこれはストリップ劇場のヌード・ショウ、いや、その面白いこと、「こりゃ、たまらん」。

追い出しコンパの席上、２期生は１期生の功労に感謝して［共学共歓］の言葉を送る、以後、この「共学共歓」が高橋ゼミのモットーとなる。

第三期生　昭和40年 (25名)(女子 3名)(聴講生 1名)

この期も出だしは上々、夏合宿は日本のチッベットと言われる長野県は秋山郷、満足な

道もないので、マイクロ・バスの後ろの席の者は天井に頭が付く程の揺れ方、その晩は例によって盛大にコンパをやっていたら、遅刻した奴が恐る恐る入ってきた、聞いて見ると、バスがないのでタクシーで来たという、その料金は三千円也、今の金にして、ざっと三万円、ああ、勿体ない。ゼミ生の中に「私はクリシチャンなので酒は飲まない」という男あり、しかし、翌日から浴びる様に飲むようになった。聞いて見ると、「神の啓示」によるとのこと。春合宿は伊豆の大島、レクリエションは伊豆の大島一周、また、この年から正式に修学旅行が行なわれ、鬼怒川温泉に一泊旅行、飲めや歌えの大騒ぎ。この期の連中は「花嫁」という歌が大好きだった。

第四期　昭和50年 (26名) (女子 1) (聴講生 0名)

高橋ゼミの各期の出来具合は夏合宿の出来・不出来で決まるといわれている、この期は福島裏磐梯を選んだが、これは失敗、あげくの果てに、ゼミ生の一人が最後の講義が終った嬉しさで屋根に登ったのが大失敗、90キロもの体を支え切れずに転落、足の骨を折って、「はい、それ迄よ」、救急車で入院、全員しょんぼり。

この期の春合宿は伊豆東海岸、この時のレクも雨で、「はい、それまでよ」でした。

修学旅行は伊豆の大島。

第五期　昭和51年 (28名) (女子 0名) (聴講生 0名)

この期は22名しか採らなかったのに、合気道部（当時私は合気道部の部長をしていた）から５名の飛び入りがあり、更に、どういう訳か知らないが、四期生の一人が念入りに入り直しをしたので28名になってしまった。（調べて見たら当時は三年から四年へ進む時に落第の制度があった）。

夏合宿は信州の志賀高原の温泉ホテル、此処は観光客が多いので我が高橋ゼミはホテルの地下室に入れられた。これは高橋ゼミにとっては大変に有難いことで、夜ともなれば、呑めや歌えの大騒ぎ、マルクスという落第男はパンツを何枚も穿いておき、それを一枚ずつ脱いでは媚びを売るというストリップを炬燵の赤電球を照明として嫌らしいほど上手にこなし大喝采を博した。また、ある奴は風呂に入っていて「かまいたち」で顎を大怪我をし、先輩マルクスに連れられて町まで下山し治療に当たり、帰りにはバッグ一杯に酒を買い込み、秘かに地下室に持ち込み、その酒で毎晩大宴会を催した。自分等が持ち込んだ28本＋私の 1本では足りなかったのである、かまいたち様々とはこの事である。

また、この期からレクリエションの晩にキャンプ・ファイヤーを実施する事になった。

春合宿は千葉の鋸山、修学旅行は大いに弾んで、サン・フラワーで紀州一周ときたもんだ。コンパ長はお馴染みの椛沢の旦那である。この期で高橋ゼミの形式が出来上がった。

第六期　昭和52年 (15名) (女子 0名) (聴講生 1名)

この期から経済学部では今までの第一志望から第三志望までの制度を第一志望だけに限定した。おかげで高橋ゼミは激減し、たったの 15 名が入っただけだった。この期の合宿は三期と同様、秋山郷だった。レクリエションには宿の真ん前にそそり立つ苗場山登山と来たもんだ。私はこの登山で完全にグロッキーとなってしまった。ゼミ生が押したり引い

たりしたが、あと少しというところでダーンしてしまった。連中は薄情にも私を見捨てて行ってしまった。休むこと久し、やっとの思いで辿り着くと連中は昼食である、流石に私の昼食には手を付けずに残して呉れていた。癪にさわった私は全員を一列横隊に並ばせて、苗場山めがけて一斉放水を命令した、すると、カメラ係の大馬鹿者が真ん前から写真を撮り、後で、「先生のホースからの水の出が一番悪い」とほざいた。以後絶対に山登りをしないと決意した。

春合宿は三宅島である、此処の民宿は凄まじい所であった。荒熊の様な親父が一人で経営していたが徳利の中にはゴキブリの死骸が入っている、「飯は食い放題だ」と言いながら、小さなお櫃が一つだけでお代わりの仕様がない、ある時は、ご飯とマヨネーズだけと言ったメニュウーである、流石のゼミ生も「これでは死んでしまう」と合宿途中で帰る事にした。ところが、帰りの海は大荒れでフリジャー丸は木の葉のように揺れ動き、我々は便所の前に蹲まり、胃袋までも吐き出す程の苦しみを味わったのである。私は「六期との付き合いは絶対しない」と決意したのであるが、残りの合宿は私の家でする事になってしまった。そして、修学旅行はお伊勢参りときたもんだ、連中はいい気なもんで、コンパで酔っ払って宿の窓から窓へ飛び移るという態たらくである。

第七期　昭和53年 (24 名)(女子 0名)(聴講生 0名)

この連中もまた手に負えない奴等で、大体、女子のゼミ生がいない期には野蛮人が多い、と言う事が分かった。この期の夏合宿は五期と同様志賀高原で、立派なホテルの普通の客室に泊められたのであるが、その晩のコンパをやりすぎて、翌日からは地下室に移されてしまった。しかし、此処はどんなに騒いでも絶対に外部に音が漏れないので、心置きなく力一杯コンパをすることができた。いや、その面白い事、馬鹿くさい事、言語に絶するものであった。ここに北村というアナンサー崩れの馬鹿男が居り、これの司会でコンパが進行するのであるが余りの可笑しさに呼吸困難に屡々落ちいった。例えば、踊りを踊る時、足を上げた途端に、そこで歌が止まって、しばし足は上げた侭となるのである、中には、その度毎に片足でピョンピョンと飛び壁に足を掛ける奴もいる。ある晩、コンパ長の栄次郎なる悪人がサダム・フセイン顔負けの嫌らしさでレフリー役をし、ジャイアント・馬場 VS 大木金太郎ことキム・イルソンのスロー・モーション・プロレスの試合を実施したが、その、まの抜けた馬鹿らしさは天下一品であった。さらに、悪人栄次郎は秘かに「菊の会」なる秘密結社を組織し悪行の限りを尽した。

春合宿は、これまた、サン・フラワーで南紀に足を伸ばし、殆んど勉強もせず社会情勢の視察ばかりをした。修学旅行は「草津よいとこ」で一晩中呑んで、ハイ、それまで。

第八期　昭和54年 (24名)(女子 2名)(聴講生 0名)

この期も夏合宿を失敗した組である。場所は裏磐梯、以後、高橋ゼミは此処に行くことを全面禁止とした。何分にも何十組もの宿泊客の相宿で、コンパを９時までと制限されたため、高橋ゼミの威力を発揮することができなかった。これではならじと春合宿は伊勢神宮の末社である二見神社の社務所で実施することにした。二見神社の神主さんの息子の計らいである。二見神社でマルクスの資本論を勉強をする、神主さんも息子顔負けの強者で

ある。夜ともなると社務所は俄然熱気を帯び、異常な騒ぎとなる、呑んで騒いでプロレスをして、頭隠して尻を出し、神も仏も踊りだす乱痴気騒ぎの毎晩であった。最後の晩には神主さんも一緒に歌いだす始末である。目出度し、目出度し、で合宿は終る。

私は今でも神主さんに感謝している。修学旅行は鎌倉・三浦岬を巡り歩いた。

第九期　昭和55年（ 34 名 ）(女子 3名)(聴講生 0名)

この年我が恩師高橋梵仙先生病床に臥す、ゼミ生十名を高橋ゼミで纏めて面倒見ることとなる、高橋ゼミ始まって以来の大人数である。夏合宿は宮城蔵王の麓の新築したばかりのスキー場のロッジである。最初の晩、次の晩頃までは違和感と纏まりの欠如からしらけたコンパであったが三日目から俄然馬鹿力が出て、例に依って、呑めや歌えの大騒ぎ、34名の大合唱は蔵王の山を揺るがす程の迫力でロッジの人々を驚かせた。レク日は御釜巡り、そして、その晩、ロッジの人々を招いての大コンパ、赤々と燃える大掛かりなキャンプ・ファィヤーを囲んで喉が嗄れるまで、若いエネルギーが燃え尽きるまで何時迄までも何時迄も歌い続けた。ちなみに、この期のコンパ芸は最高で、百姓一揆でもさせると本物の役者そこのけの名演技を披露した。また、衣裳もこの頃から何処からともなく集まって、衣裳係を設置するようになった。高橋劇団のはしりとなった。

しかし、この期の傑作はゼミ・ハウスの建築である。私はなけなしの金百二十万円を投じて大豪邸を建築する決意で、家の前の土地を区長さんから借り、ゼミ生共をかり集め、整地し、更に、新築のゼミ・ハウスに炊事場と布団小屋を増築し、更に水洗便所まで作った、しめて、百五十万円、今でも炊事場の板に大工棟梁コールマン（見事なコールマン髭をはやした奴の綽名）という落書きが残っている、便所の穴掘りを含めて三年・四年総掛かりで作った傑作であり、卒業生たちも協力してくれ、約五十万の金とコップ、徳利、毛布に布団、その他諸々が寄付された。春合宿は南紀・伊勢、そして修学旅行は犬山城。

第十期　昭和56年 (22名)(女子 0名)(聴講生 2名)

九期が余りにもコンパ上手であった為、この期は無芸の十期として有名である。

夏合宿は信州は白馬山の麓、無芸の十期は歌も満足に歌えず、仕方なくコンパに「青年の主張」なる大演説をぶつことになり、各自が今迄の生きざまを披露したが、その中で、生れてこのかた、五回も骨折をしたと云う馬鹿者の話には、皆その馬鹿さ加減に恐れ入った次第である。此処に一人の大金持ちが居り、「金のない奴や俺ん処に来い」とばかりに貸しまくり、ゼミ生でこの金貸しの世話にならない奴はないほどで、それから十年、未だに返さない不心得者がいる筈である。また、身長199 Cm、体重100 Kgという相撲取り顔負けの癖に甚だ内気な巨漢がいた、私はこれにリトル・ジョンなる綽名を付けた、また、入室試験の面接のさい「私は恥ずかしがりで人前で話など出来ない」と言うので綽名を「内気」としたが、これほど饒舌・多弁な男を見たことがない。

ところで春合宿は伊豆の大島、レクの日は島一周で、先ず手始めに御神火拝み、あの長い坂道をリトル・ジョンが私をおんぶし、ほかの連中が前になり後になりでリトル・ジョンを押したり、引いたり。修学旅行は京都東山。この期からレポートの枚数が五十枚以上となる、これは、ゼミ生共が自主的に決めた珍しい例である。

第十一期　昭和57年（ 19 名）(女子 3名)(聴講生 0名)

この期のゼミ長は種平という大馬鹿者で、その上、おっちょこちょいで大酒飲みで、我が高橋ゼミでこれに勝る酒豪は私を除いては未だ現われない。

この期に三人娘がおり、ゼミ長は終始一貫この三人娘に引っ掻き回され、号令の掛け直しの連続であった。その理由はゼミ長の鼻の下の長さにあった。

夏合宿は信州の松原湖であり、勉強もそこそこに毎晩大酒を呑んでいた。ところで、ここに、自称「天才」を名乗る貧乏神の化身みたいな男が居り、これは、あのくだらない劇団「否」の部員でもあり、これが中心となって上演した「桃太郎、悪徳爺婆を討つ」と云う出し物は高橋劇団最高の傑作として世に知られている、これに対し、大酒飲みは、常に「馬鹿殿」だけを演じ、その猥褻さで大いに三人娘の反感を買ったのである。

春合宿は伊豆の大島、その帰途の船内で大コンパを開催し、船内の乗客達から盛大な拍手を頂戴したのが馬鹿ゼミ長最大の功績である。

この馬鹿ゼミ長は修学旅行には豪華観光バスを仕立てて伊豆一周を企画したのであるが、いざ出発のその時に、昨夜余りにも呑みすぎたのが運の尽き、寝坊をしてしまいゼミ生達を一時間以上も待たせたのである。しかも、前日バスの中に缶ビール・酒を山ほど隠し置き、二泊三日の旅行中小原庄助の如く呑みあかしたのである。

さて、卒業式の当日、かの自称「天才」は質屋から金二千円也を投じて「燕尾服」を購入し、それを着用し、晴やかに、厳そかに式に臨んだのである。壇上に燕尾服の学長あり、そして檀下に、これまた燕尾服の卒業生あり、この年代ものの燕尾服は少しだぶつき、そちこちに酒の沁み跡などもあったが、その荘厳さにはいささかも影響はなかった。

第十二期　昭和58年（ 18 名)(女子 2名)（聴講生 2名 ）

この期も大したことのない期で、夏合宿は栃木県の川俣温泉郷の民宿であった。無論、温泉は出ない。

さて、この合宿のコンパ用にとゼミ長は母親を拝み倒して一張羅のドレスを借用し、これを着て、毒々しい程に厚化粧をしたのだが誤りで、見るも無残な醜女姿で踊りまくり、以後、このゼミ長はヤベ子という綽名を賜り、今もヤベ子の名で我がゼミの盆踊り仮装大会の委員長を務めている。

合宿中のある晩のコンパも終り頃、ゼミ生加代子の祖父が死んだと言う電報が入り、私の車に加代子を乗せ、薫という右も左も判からない馬鹿者を、多分これが一番酔っていないだろうということで助手として、川俣から霧降高原、そして日光へと降りて行ったが何分にも酔っ払っているので目茶苦茶運転、助手の薫は酔眼朦朧、しかも当時は道路の工事中で川中の砂利道を走らねばならなかった。お巡りに捕まったら一巻の終りとおっかなびっくり運転して日光の町中に入っていったら大勢のお巡りが懐中電灯を照らして大騒ぎ、万事休すと観念したら、お巡りが懐中電灯で「早く出てゆけ」との合図をした、事故だったのである、「命拾い」とはこのことである。いろは坂、金精峠、沼田、前橋そして高崎、加代子を家に届けたのは朝の三時頃であった。嗚呼、こんな連中を相手にしては俺の命が危ないと嘆いたものである。

春合宿はこれまた伊豆の大島、そして修学旅行は名古屋・伊勢方面、鳥羽の港に快速艇

で到着、すると連中は何を夢見たか一人ずつ大風の中を走り抜けて防波堤の端に立って自分の名前を私に向かって叫んでいる、乗客達は目を丸くして「精神病院かなんかの患者の旅行か」と一人だけ残った私に聞く、私は「それよりも重症です」と答えた。

第十三期　昭和59年（ 9名 ）（女子1 名）(聴講生 1名)

この頃になると、高橋ゼミは経済学部の三大ゼミとして有名になり、そのハードさではトップとの噂で、多くの学生は我がゼミを敬遠するようになり、とうとうこの期は９名になってしまった。

ところが、この期は数こそ少ないが、目茶苦茶に結束し、またガムシャラに勉強を始めた、しかも、私が教えない事ばかり勉強するのである。そして、最後には、「革マル」的危険思想を抱き、高橋は右翼・日和見であると宣まうに到った。私は一喝のもと此の危険思想家共を叱りつけ、そして、学問とイデオロギーとの違いを懇々と説いた。以後、彼等は危険思想はきっぱりと放棄したが、今度はストリップに熱中し、三日とおかず小屋通いを始め、かぶりつきで観察し、ストリップ学なるものを研究し始めたのである。この研究が出来たのは聴講生であった女親分が中国に留学したことが彼等に幸いしたのである。

此の期の夏合宿は富士五湖の一つ西湖であり、此の期から車を利用するようになった。

春合宿は十一期の馬鹿ゼミ長が発見した西伊豆の「道ずれ荘」である。また、彼等は夏合宿後のレポート五十枚のほかに、春合宿後にさらに八・九十枚のレポートを自主的に書いて提出したのである。以後、此の方式は継承され今日に到っている。

修学旅行は車で成田、犬吠岬、そして、潮来に一泊した。連中はストリップ学を研究しただけあって、宿に芸者を呼んで祝宴を張ったのである、しかし、和田なる馬鹿ゼミ長が芸者さんに「芸者さんの労働条件は労働法によって保証されていますか」と質問したのには当の芸者さんが驚いてしまった。翌日は北上してハワィヤン・センターに行き、あの有名なフラ・ダンスを鑑賞したのであるが、レッスンの時間になると連中は、いの一番に壇上に駆け登り、目当てのダンサーの側にへばり付き、へっぺり腰で踊り続けていた。

第十四期　昭和60年（16名）(女子 0名) (聴講生 0名)

此の期も出来の悪い期で、夏合宿は武尊山の麓、片品村で行なった。例に依って車での移動であるが、ガイド役のゼミ員が、格好いいとこ見せるのは此の時とばかり時速七・八十キロもの猛スピードで走りまくったから後続車は付いて行けず、結局、此のスピード狂も皆の車からはぐれてしまい、道に迷ってしまうという態たらく、以後彼は皆から「ブン、ブン」と綽名された。春合宿は伊豆の大島、修学旅行は浜松のホンダの自動車工場の見学、更に北上して長篠城跡迄足を伸ばした。

確か春の新歓コンパの時だったと思うが、私の母がたまたま来て居り、そのコンパ芸を見せたが、出し物は「精五郎物語」（これは私の事のようである）であり、我が老婆は「八十三才になるがこんなに面白い劇を見たのは始めてだ。」と褒めてくれた。

彼等は私に余りにも「馬鹿、馬鹿」と言われたのに発憤し、真剣必死と芸を磨いたのである、その甲斐あって、馬鹿くさいことなら何でも出来る、あっぱれ名劇団に成長したのである。

第十五期　昭和61年（13名）（女子 2名）（聴講生 1名）

此の期もまた出来が悪く、さしたる業績も残っていない。夏合宿は信州の蓼科、コンパで満足な芸一つ出来ないのに腹を立てた私は、さっさと寝てしまった。困った連中は朝まで会議を開き対策を協議した。その甲斐あって、翌日のコンパは大出来かと思ったら、さにあらず、さっぱり良くない。

彼等が目覚めたのは九月の高橋ゼミ十五周年記念大会に出席してからである、百数十名の先輩達の一糸乱れぬ統制ある立ち居振る舞いに彼等は驚嘆してしまった。特に、百数十名の先輩達が会場一杯に大きな輪を作り、肩を組み、声を一つにして歌う姿に高橋ゼミの真の姿を見たという、そしてその時の肩のうねりは大きな一つの波であったという。（尤も、この時、ホテル側は各部屋に対してドアを閉めるようアナンスしたとのとこ）。

それ以後、連中はなりふり構わず馬鹿に徹する努力をした。今度こそ、その甲斐あって本物の馬鹿に成ることが出来たのである。春合宿は伊豆の道ずれ荘、修学旅行は伊勢から伊賀路を越えて忍者屋敷まで。此の期からレポートは春夏共70枚以上となる。

第十六期　昭和62年（18名）（女子 3名）（聴講生 3名）

この年からテキストは私が英訳した［Basic Text Book on Capital ］を用いる。此の期の夏合宿は信州は伊那、車五台を連ね、無線機で連絡を取りながらはぐれ烏を出さないように配車長が誘導する。連中は九期以来の芸達者で次から次と訳の分からない出し物が登場する、ある時、顔を縦に黒と白に塗り分けた役者が出てきたが、その役者の台詞から死者を弔らう為だと言う事が分かった。

ある晩、コンパが終っても騒ぎが絶えないので大声でどやしたら一寸の間静かになり、やがて、コンパ長が恐る恐る私の部屋に来て「先生、大変です」と云う、行って見ると馬鹿が一人便所に入っているが戸が開かない、私は十六年前を思い出し苦笑をした、奴はそのまま明け方まで便所の中で眠り通した。

レクは御岳山登りである、山頂の展望の良い岩場でお昼のおにぎりを食べる時、先生用として沢庵をわざわざ用意してくれた、今でもその美味しさが忘れられない。帰りのケーブルに乗る広場で、私を水戸黄門に仕立て、連中が全員地面にひれ伏した写真が今も残っている。

この期に台湾から張なる留学生が来ていた、彼女は日本の盆踊りが見たいというので、我が団地の盆踊り大会を見せることにした。丁度、何かの会合でゼミの卒業生や在校生も来ていたので、張さんに家内の古い浴衣を着せて、皆と一緒に盆踊りの見学に行ったが、出しゃばりたいのが我がゼミの欠陥、たちまち踊りの輪の中に入って踊りだした。団地の人々も「それ、助けっ人」と大歓迎してくれたのがきっかけで、それ以後、盆踊りに高橋ゼミが参加するのが恒例となる。その時のリーダーが十二期のヤベ子である。

春合宿は例に依って「道ずれ荘」、合宿最後の晩、どうした事かコンパが大分遅れた、やがて副ゼミ長が恐縮しながら「これからやります」と云う、案内されて会場に入った瞬間、あっと驚いた、全員がお化けのように変装していたのである、それから何が始まったか、それは云わずと知れた事である。修学旅行はトヨタの自動車工場、そして宿は下呂温泉であった。

第十七期　昭和63年（ 16 名）(女子 1名)(聴講生 2名)

此の期も出来の悪い期で叱られてばかりいた。夏合宿は信州の戸隠、雨ばかり降り、連中が最も期待していたレクの日も天気が悪かった。それでも、一期と同じに野尻湖に行ったが、十七年の歳月は長いもので、昔の面影は殆んど見られず今昔の感を深くした。

帰ってきて大急ぎでキャンプ・ファィヤーの準備をしたが、この頃から雨は本降りとなり泣く泣く中止、連中はしよげてしまいコンパも盛り上がらず、「駄目の十七期」と自分等を自嘲した。

八月の団地盆踊り大会に、ヤベ子の発案で美女・怪獣・ハワイアン・スタイル・老人・病人その他諸々の仮装スタイルで踊りまくり、やんやの喝采を博したのである。

この先輩達のファイトを見て、負けてならじと一念発起、春合宿は千葉の館山へ向かったが、行きもまた大雨に降られ、よくよくの雨男と嘆いたのである。

それでも、勉強にコンパにと情熱を燃やし、何とかして「駄目の十七期」の汚名を晴らさんとした努力の甲斐あって、いや、盛り上がること、特に、美人コンテストの凄まじいこと見る者すべて目を背けざるを得ない出来栄えで、招待された宿の主人夫婦も仰天してしまった。此の時の第一位優勝者は「デン助」に変装した紅一点のカ子という綽名の子であり、また、鳥羽なる男は、およそ人間が考えられ得る極限的醜悪さを表現した醜女姿で悠々男子の部の第一位を獲得し、あっぱれ馬鹿振りを発揮したのである。

修学旅行は浜松のホンダとトヨタの自動車工場であり、帰路わざわざ伊豆の「道ずれ荘」に寄って美味しい御馳走を満喫したのである。

第十八期　平成元年（ 16 名）(女子 0名)(聴講生 0名)

此の期の振り出しはまずまずというところであり、夏合宿は信州は小諸であった。此処もまた御馳走の沢山出る所であり、連中は大いに満足していた。

レクは女神湖・白樺湖・ビーナス・ラインを車五台で走行するというもので、先ず最初に女神湖に行きボートに乗り、それから昼食、さて、いざ出発という時にコンパ長が「先生、これから湖の土手で皆で歌を歌うので善し悪しを判定して下さい」という、早速歌が始まったが、緊張しすぎたか馬鹿でかい声の出し過ぎか、やや調和に欠ける、両腕で［×］のサインを出す、連中、今度は慎重に自分等の期歌である「さらば涙と言おう」を歌った、流石にこれは自分等の歌なので上出来である、［○］のサインを出す、連中は歓呼の声を挙げて喜ぶ、そして、おまけにもう一曲歌って胸を張って引上げてきた、回りの人々は不思議そうな顔で見ていた。

宿に戻って、早速キャンプ・ファィヤーの準備である、宿の叔母さん達や隣のご家族等を招待して花火大会、美人コンテストその他諸々、最後は学生歌と校歌を歌って感激のうちにこの大イベントは終る。

今年の盆踊り大会では男は全員美女に、女はゼントルマンに変装した。

春合宿は前年同様千葉の館山、そして修学旅行は美味しいご馳走目当てに「道ずれ荘」を皮切りに三浦岬・鎌倉を回る。

その彼等もこの三月に私の元から去って行った。想えば、一期から十八期迄どの期もみんな同じであった、「どこを切っても同じ金太郎飴」これが高橋ゼミである。

高橋ゼミ２０年の軌跡

Ｓ４７年（１）	２３名（聴講生３名）	（内女３名）	（夏合宿－長野・妙高）	（春－嵐山）	（修学旅行－なし）
Ｓ４８年（２）	２９名（聴講生２名）	（内女０名）	（夏合宿－山形・蔵王）	（春－千葉・白浜）	（修学旅行－長野・諏訪）
Ｓ４９年（３）	２５名（聴講生１名）	（内女３名）	（夏合宿－長野・秋山郷）	（春－大島）	（修学旅行－鬼怒川温泉）
Ｓ５０年（４）	２６名（聴講生０名）	（内女１名）	（夏合宿－福島・裏磐梯）	（春－東伊豆）	（修学旅行・大島）
Ｓ５１年（５）	２９名（聴講生０名）	（内女０名）	（夏合宿－長野・志賀高原）	（春－千葉・鋸山）	（修学旅行－紀州）
Ｓ５２年（６）	１５名（聴講生１名）	（内女０名）	（夏合宿－長野・秋山郷）	（春－三宅島）	（修学旅行－名古屋・伊勢）
Ｓ５３年（７）	２３名（聴講生０名）	（内女０名）	（夏合宿－長野・志賀高原）	（春－南紀）	（修学旅行－草津）
Ｓ５４年（８）	２５名（聴講生０名）	（内女２名）	（夏合宿－福島・裏磐梯）	（春－伊勢）	（修学旅行－鎌倉・三浦岬）
Ｓ５５年（９）	３４名（聴講生０名）	（内女３名）	（夏合宿－宮城・蔵王）	（春－南紀・伊勢）	（修学旅行－犬山・名古屋）
Ｓ５６年（10）	２２名（聴講生２名）	（内女０名）	（夏合宿－長野・白馬）	（春－大島）	（修学旅行－京都・大原）
Ｓ５７年（11）	１９名（聴講生０名）	（内女３名）	（夏合宿－長野・松原湖）	（春－大島）	（修学旅行－西伊豆一周）
Ｓ５８年（12）	１８名（聴講生２名）	（内女２名）	（夏合宿－栃木・川俣湖）	（春－大島）	（修学旅行－名古屋・伊勢）
Ｓ５９年（13）	９名（聴講生１名）	（内女１名）	（夏合宿－山梨・西湖）	（春－西伊豆）	（修学旅行－常磐道湯本迄）
Ｓ６０年（14）	１６名（聴講生０名）	（内女０名）	（夏合宿－群馬・片品）	（春－大島）	（修学旅行－静岡・長篠城跡）
Ｓ６１年（15）	１３名（聴講生１名）	（内女２名）	（夏合宿－長野・蓼科）	（春－西伊豆）	（修学旅行－伊勢・伊賀）
Ｓ６２年（16）	１８名（聴講生３名）	（内女３名）	（夏合宿－長野・伊那）	（春－西伊豆）	（修学旅行－犬山・下呂）
Ｓ６３年（17）	１６名（聴講生２名）	（内女１名）	（夏合宿－長野・戸隠）	（春－千葉・館山）	（修学旅行－静岡・愛知）
Ｈ　１年（18）	１６名（聴講生０名）	（内女０名）	（夏合宿－長野・小諸）	（春－千葉・館山）	（修学旅行－西伊豆・鎌倉）
Ｈ　２年（19）	１４名（聴講生０名）	（内女２名）	（夏合宿－長野・小諸）	（春－西伊豆）	（修学旅行－西伊豆鎌倉）
Ｈ　３年（20）	１０名（聴講生１名）	（内女４名）	（夏合宿－長野・小諸）	（春－千葉・館山）	（修学旅行－犬山・磐田）
合計	400名（聴講生19名）	（内女30名）			
Ｈ　５年（21）	３名（聴講生 0名）	（内女 0名）	（夏合宿－長野・小諸）	（春－千葉・館山）	（修学旅行－